

佳作

「初・人間ドック」

上田 瑞穂さん

四月に入社を控え、二月に新入社員全員で人間ドックを受けるよう指示された。これまで大学での簡易的な健康診断などは経験してきたが、前日から食事を抜く本格的な人間ドックは人生で初めてだった。同じ青色の検査着を着た同期たちと長椅子に座り、採血などされる様子は客観的に見るとなんだか可笑しかった。人間ドック後には皆で病院内の食堂で軽食をとり、初めての人間ドックは穏やかな思い出だった。

しかし、入社してまもなくして送られてきた結果に青ざめた。尿検査で異常が見つかり、要細密検査となっていたのである。総合病院の腎臓内科に通い、尿検査や血液検査を繰り返すも病気の断定はできず、腎臓の組織の一部を採取して検査する腎生検を行うことになった。腎生検には一週間ほどの入院が必要で、新入社員でありながら職場にまとまった休みをお願いするのは大変気のひけることであった。しかし、上司は体が一番大事だからと誰一人全く嫌な顔をせず、休みを許可してくれた。私にとって初めての有給消化であり、初めての誕生日休暇も検査入院に消えた。

記憶にある限り、入院は初めてで、入院中も初めての経験ばかりであった。まず、腎生検後はベッド上安静が必要で、体を起こすことも許されないため、尿道カテーテルを入れなくてはならなかった。同い年だと微笑む看護師に尿道カテーテルを挿入される情けなさは忘れられない。横になった状態で食べられるよう、全て串刺しになったスピット食も初めて食べた。初めての畜尿検査、長時間の点滴。一週間で多くの初めてを経験した。

一か月後、I g A腎症という病名が付いた。将来、人工透析が必要になる可能性がある病気であり、今の数値では妊娠は許可できないという。現在二十三歳、ごく自然に思い描き、友人たちと語り合っていた家族像が霞んだ。今後の治療としては、週末入院をし、薬の服用を繰り返すという。また職場に迷惑をかけることが一番に気にかかる。外国語を学んでいた大学生の時には、眼の病気が見つかり、留学を諦めなければならないことがあった。大事な時にいつも病気が邪魔をする。自分の体の弱さに腹が立った。

しかし、友人に話すと思いがけず前向きな言葉が返ってきた。「お年寄りの気持ちが誰よりもわかる若者じゃん。」と。私の勤める職場は金融機関であり、窓口に来るお客様は高齢者が多い。口々に自身の病気やパートナーの体の不自由さ

を嘆いている。若くして病気のことや病院の話に共感できるとは確かに珍しく、話が弾む。病気になって、病院に通ってばかりいるが、そのことが仕事に少しでも役に立つと前向きに捉えることが出来た。思い返せば、眼の病気が分かった学生時代、悔しさをバネに「長期の留学は行けなくても誰よりも濃い経験をしてやる！」と意気込んでいた。何かに誘われれば顔を出し、アルバイト代をつぎ込んで、何度も海外を旅した。社会人になって日々の忙しさに気をとられ、さらに新たに病気が分かったことで後ろ向きになっていたことに気が付いた。

初めての人間ドックは病気の早期発見ができたことはもちろん、私の周りが誰も経験していない多くの初めてを与えてくれた。そして、治療が始まると初めては増えていくであろう。今後辛いことも必ずあるが、その経験もひっくり返して活かしていきたい。病気の早期発見が出来たこと、治療が受けられる環境、理解ある周りの方々、恵まれたすべてに感謝し、まだまだ国内外様々な土地に足を運んでこの目で色々なものを見て、食べて、経験したい。ただただ過ぎていた毎日に、気づきとたくさん初めてのを与えてくれた初めての人間ドック、ありがとう。